大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正三年七月一日發行第二卷第十號（大正三年六月三十日印刷納本）

近代思想

七月號

■寄附金募集（廣告）……荒畑勝三 大杉榮（一）
■賭博本能論（評論）……大杉榮（二）
■人間の漂流（評論）……和氣律次郎（八）
■胡麻鹽頭（雜錄）……堺利彦（一三）
■銅貨と銀貨とで（感想）……大杉榮（一四）
■僧と惡魔（小話）……ダスタエフスキー 和氣律次郎（一六）
■大久保より（雜錄）……榮（一七）
■癈兵救慰會（小說）……荒川義英（一八）
■新刊（批評）……榮（二三）
■寄附金應募……（二四）

近代思想社
東京府下大久保百人町三五二

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

活動之日本

野依社長出獄大活動！本誌の聲價忽ち昂る！

▲曾て三井家の内幕を抉剔解剖して官界實業界の醜怪事突發を豫言し、いま正々堂々の論陣を張って三井家主人に位記返上を促しつゝあるは本誌の態度也

▲曾て東京市民の公益の爲に東京電燈會社を痛擊して電燈料三割減を主張し、竟にその實行貫徹を見たるは本誌の言論也

定價 金十一錢 郵稅一錢五厘

毎月二回發行 一日 十五日

七月一日號要目

▲實力養成の工夫……三宅博士

▲余が支那視察中最も痛切に感じたる一事……澁澤榮一男

▲日本はその特產物を以て世界に起て……若宮卯之助

▲獄中に於て獲得し今實行成功しつゝある處世の根本義……野依社長

▲我が過去の自白……野依社長

▲古今獨步高野式抵抗養生法出現す……記者

▲危險なる愛國生命保險……社說

滿卷の文字悉く慨世憂國の熱情赤誠の結晶！

東京市麹町區有樂町一の四

實業之世界社

振替貯金口座 東京三四三三

213-442254

小說か論策か
空想か豫言か

？　著者は何人ぞや

一海軍中佐著

次の一戰

菊判全一冊

寫眞版海戰圖二十一葉
地圖八葉
統計表六葉

正價金壹圓廿錢
小包料金八錢

日本をして永遠に偉いなる且美くしき郷土たらしむるを得る乎、將た國を擧げて焦土として、敵國蹂躙に任すの悲運を來す事なかるべき乎、此疑問を決するは武力の鍵也、**雄大なる構想と椽大なる筆とを以て夙に讀書社會に喧傳する某海軍操觚者**憂國の情忡々として禁ずる能はず、**爛々たる軍事的炬眼に映ずる次の一戰**を描きて、戰勝に馴れたる國民の無理解を警醒せんとす、其體は小說なれども其基礎確實なる數字的事實に本づきて一も架空の想像を用ひず、２２が４の缺く可からざる數理を信ずる以上は、**次の一戰**は的確に本書の豫言する如き運命を有す、戒心せよ、熟慮せよ、更に雄大なる覺悟を定めて、**次の一戰**に準備せよ、**是れ實に天の日本を警戒する最大の豫言也**

發兌元　東京麴町區平河町五ノ五
（電話番町二〇九三、四九二五番）
（振替口座東京三八一七番）
金尾文淵堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Asia Librar

最新刊

法學士 西野雄治先生著

政黨と政黨政治

菊判洋装全一冊
紙數三百五十頁
定價金八拾五錢
郵税金八錢

本書は我憲法の運用が政黨政治に歸着すべきを主張し、そが本體組織、活躍、黨員の去就進退等、政黨に關する一切の現象を網羅し、而も著者の鋭利なる觀察の下に解義評論し、その縱横無盡にして一々肯綮に當れる論議に至つては、蓋し近時政論界の一大權威として他に其の比を見ざる快著なりとす。今や政黨の混亂その極に達せるの秋、本書の出現は渾沌たる政界の指南車たるべく、又快刀亂麻を斷つの一大威力なりと信ず。敢て祖國百年のため江湖に一本を推奨する所以也。

發行所 泰平館書店
東京市神田區南神保町（振替東京二四八五九番）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

へちまの花

賣文社

▲文章一切の代作添削
▲反譯物一切
▲編輯物一切
▲各種原稿製作
▲校正寫字タイプライター
▲廣告文章
▲印刷代辦
▲營業案内呈上

責任者 白柳秀湖 堺利彦

●六月號要目

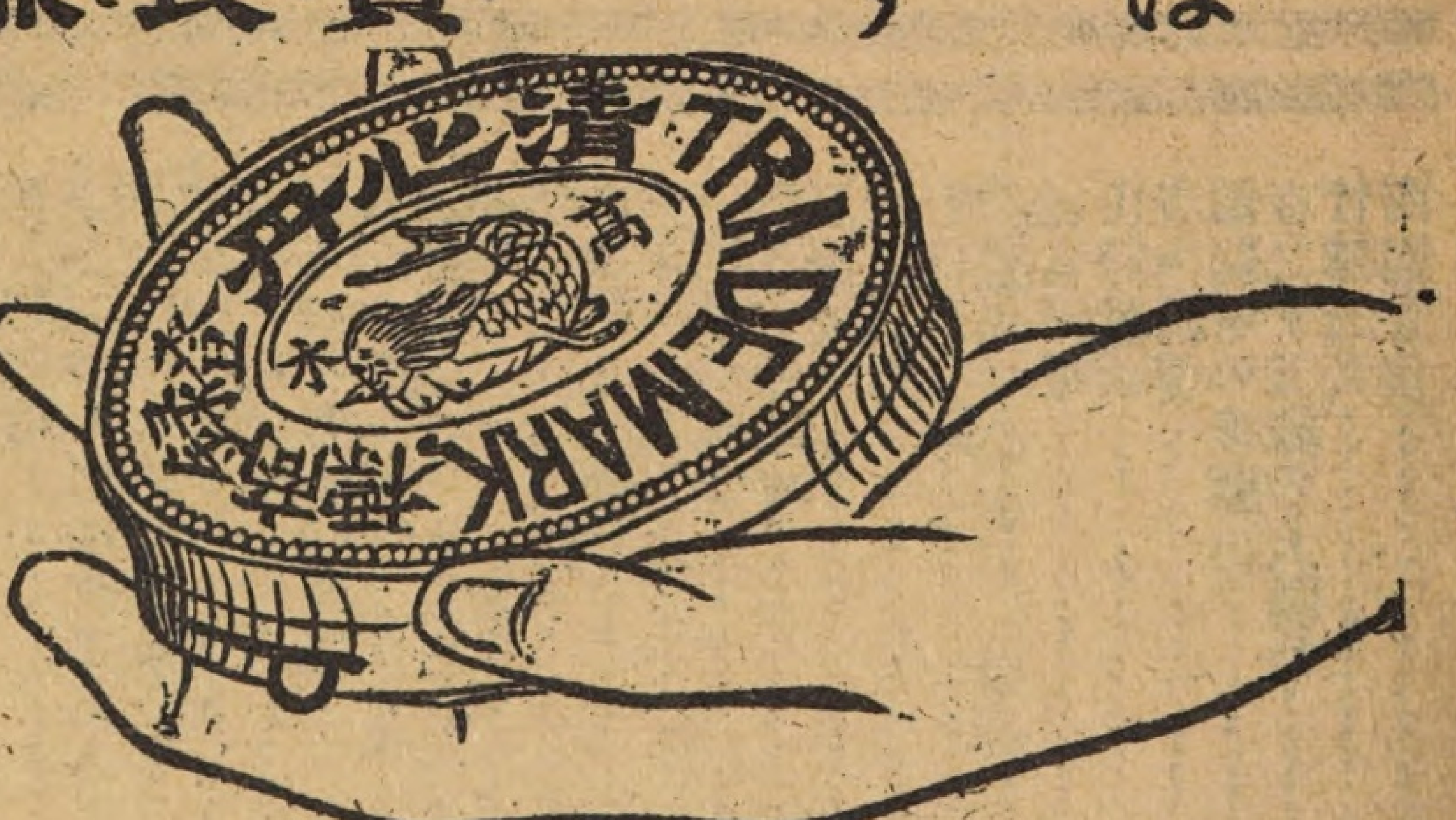
▲夾竹桃の家より　小口みち子
▲コネーアイランド　せいじ
▲遊女（歌）　小口みち子
▲白黒青赤黄紫……
▲誰れの血　鈴木笛香
▲提灯行列……
▲新婚の姪を送るの序　生田虎藏

●一年分前金三十錢

東京麹町區永田町二丁目六十八番地 **賣文社** 振替東京二四六二六 電話新橋二八五七

人若し藥を需めんとせば須く選擇を要す

清心丹の三大特色は
一、効能の確實
二、品質の善良
三、價格の低廉



主治効能
心思欝憂、頭痛眩暈、胸痛腹痛、過酒過食、悪心嘔吐、溜飲宿食、中暑中寒、下痢痳痢、舟車不快、咯痰咳嗽、咽喉不調、歯痛口臭

定價
壹圓箱入　五拾錢箱入　參拾錢罐入　十五錢罐入
拾貳錢瓶入　貳拾錢紙包　拾錢紙包　五錢紙包

本舗 東京市日本橋區元大坂町八番地 高木與兵衛

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

若宮卯之助君著

一讀ヲ乞フ

一部五十五錢　郵稅六錢（四六判二百四十頁）

序

其の內容の、一たび公にされたと云ふに、一度胸が据り。其の性質の知己を後世に待たざるに於て、氣輕になれり。而して其の運命の、或は一月の後に、夜店の呼賣に上ることを覺悟の前に、敢て此の不滿足の書を著はしました。

若宮卯之助

目次

是が帝國の面目である乎……
低能兒の政論……
最後の一戰……
新聞の論說は何故に人が讀まぬ乎……
日本人の慢性的無解決……
日本と日本人との衝突……
殉死論……
浪人業の浪人……
爾を躾けた者は誰である……
更に陸軍と衝突せよ……
桂公退くべし……
喋べる政治家……
日米間の最後の問題……
米國の政黨……
非官僚論……
陣笠論……
悟つてはならぬ……
教訓業者に告ぐ……
人の一生……
不滿足の福音……
貧乏人の心理……
原撫松……
乃木將軍……
野口米次郎……
雪嶺先生……
德富蘇峯……
山路愛山……
寺內總督……
煩悶中の後藤男……
百二十五歲の大隈伯……
竹越三叉……
西園寺侯……

發行所　東京市京橋區木挽町六丁目　ナショナル社　振替二一四八九一番

第二巻第十號

寄附金募集

來る十月一日僕等二人の創刊する、新雜誌の保證金を得んが爲めに、同志諸君及び同情者諸君の寄附金を仰ぎたい。

此の寄附金の募集期限は、九月十五日までとする。

寄附金は其の金額の多少を問はない。

寄附金の御送付は成るべく本社の振替によられたく、又其の寄附金なる事を明記せられたい。

寄附金受領の上は、其の寄附者の氏名及び金額を本誌上に記して、受領證に代へる。

誌上には匿名を希望せられる方も、僕等には、成るべく本名を明かして戴きたい。

猶此の新雜誌の計畫に就いては、本誌前號の『大久保より』を御參照を乞ふ。

荒畑勝三
大杉榮

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

賭博本能論

大杉榮

僕等の勞働雜誌創刊の計畫に就いて、或る深切な二三の友人は、僕等に忠告して言ふ。かの大逆事件以來、歴代の政府の方針は、一切の無政府主義的及び社會主義的言論を、絶對に禁止すると云ふ事にあるらしい。大隈内閣が言論の尊重を宣言したと云つても、勿論それは、君等には適用される筈がない。現に『新佛教』五月號は、堺君の『平民讀本』の爲めに、發賣禁止の厄に遭ひ、又日本勞働黨の發行した『勞働諸君に與ふ』と題するチラシも差押を食つてゐる。君等の新雜誌は、或は創刊匆々此の手を食つて、おまけに君等二人も、すぐ樣ぶちこまれるやうな事になりはしまいか。いや、或は政府では、手ぐすね引いて、十月の來るのを待ち構へてゐるのかも知れぬ。さうなると、まるで君等は、政府のわなの中へ、わざわざ飛びこんで行くやうな愚に陷いる。それよりは矢張り、もう暫く忍んで、今のまゝの『近代思想』に據つて、例の哲學とか科學とか文學とか云ふ安全な保護色の下に、君等の主義の漠然とした傳道に從つたらどうだらう。それに、君等は智識的手淫なぞと云つて妙にけなしてもゐるが、其の手淫のとばちりで立派に姙んだものも、隨分あちこちにゐるんだ。

そこで僕は此の深切な友人等に答へた。

僕等はもう其の所謂安全に飽き飽きしたのだ。と云ふよりは寧ろ、此の安全が、却つて、僕等の生を萎縮さすやうに感じたのだ。そして今度は、君の言ふ其の危險の中へ、わなの中へ、わざわざ飛びこんで行つて見たくなつたのだ。僕等の本能と僕等の理智とが結び付いて、どうしても其處へ飛びこんで行かねばならぬ力を、僕等の中に生じさしたのだ。

そして僕は、其の友人に說いた。

アナトル・フランスの著『エピキュルの園』の中に、賭博うちの心理に就いての、興味深い二つの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

小話がある。

其の話の一つはかうだ。

賭博氣違にとりつかれた二人の船頭があつた。それが難船に遭つて、あらゆる恐ろしい出來事の後に、鯨の背中に乘つかつて漸く死を免れた。すると二人は、そこへ乘つかるや否や、ポッケットから骰子と骰子振とを取出して、賭博をうち始めた。

もう一つの話はかうだ。

神樣が、或る小供に、糸捲を與へた。そして神樣は言ふ。『此の糸はお前の生涯の糸だ。これを上げるから持つておいで。そしてお前の月日を經たさうと思つたら、此の糸を引けばいゝんだ。お前が此の糸を急いでほごすか、ゆつくりほごすかによつて、お前の生涯は、早くも遲くも過ぎて行く。又お前が此の糸に觸らないでゐれば、お前は、いつまでもお前の生涯の同じ月日にとゞまつてゐる。』小供は其の糸捲をもらつた。そして其の糸を引つぱつた。先づ大人にならうと思つて、次に其の愛する許嫁と一緒にならうと思つて、次に二人の間に出來た小供の大きくなるのを見ようと思つて、職業にありつき、金儲をし、名譽を得ようと思つて、いろ〳〵な心配を遁れ、年と共に來る悲しみや病を避け、そして遂に煩はしい老を終らうと思つて。かうして彼れは、この神樣に會つてから、四ケ月と六日で死んで了つた。

ほんとうに、アナトル・フランスの言ふやうに、賭博とは、運命が普通には長時間又は長年月の間でなければ生ぜしめない變化を、一秒時の間に齎らし來らしめる、術なのだ。他の人々の緩やかな生涯の間に散在してゐるあらゆる情緒を、たゞいつときの中に集中さす術なのだ。數分時の中に、一生涯を生きる秘訣なのだ。金を賭ける。金とは即ち、直後の、無限の可能性をもつたものだ。ひつくり返す一枚のカルタの中には、飛んで行く小さな球の中には、有ゆる地上の富貴や、榮華や、權力やの可能性が含まれてゐるのだ。それればかりではない。猶其の中には、其等のもの丶夢が、含まれてゐるのだ。しかし此の賭博には又、恐ろしいディヤマンの爪がある。勝手に窮迫を與へる、恥辱を與へる。そして此の故に、賭博が崇められるのだ。あらゆる大情慾の底には、危險と云ふ引

力がある。逆上のない逸樂はない。恐怖のまじつた逸樂は狂熱を導く。斯くの如き逸樂の中には、剛膽者の全筋肉をふるひ立たしめる、或物があるのだ。

僕は、此の賭博の心理を、冒險の心理を、人間の本能の中に見た。動物の本能の中に見た。

原始人類はあらゆる危險の裡に生活してゐた。されば此の危險を冒すと云ふ自然の傾向が、今日猶、總ての人々の中に、多少の程度に於て、見出す事が出來る。今日、多くの遊戯が、一種の危險の眞似事であるが如くに、危險は、原始人類の云はば遊戯であつたのだ。そして此の危險の爲めに危險を冒すと云ふ、危險の興味は、動物の中にも見出す事が出來る。ムウホの『シャム及びカンボジャ旅行記』の中に、これに就いての面白い話がある。

一疋の鰐がからだを水中に埋めて、大きな口をあけて、そのあたりを過ぎる餌食をつかまへようとしてゐる。それを一とむれの猿が見つけて、暫く何か協議してゐたやうであつたが、やがてだんだんと鰐のそばへ近づいて行つて、かはるがはる役者になつたり見物になつたりして、其の遊戯を始めた。一番はしつこさうな、一番大膽らしい奴が、枝から枝を傳つて、鰐のとどきさうな所まで行つて、手足で枝にぶら下つて、そして其のお得意のはしつこさで、からだを前へやつたり後へひつこめたりして、時としては手を延ばして鰐の頭を打ち、又時としてはたゞ打つまねをしてゐる。ほかの奴等も、此の遊びを面白がつて、其の仲間入りをしようとしたが、ほかの枝があまり高すぎるので、大勢で手足でつかまり合つて、一連の鎖をつくつて、そしてぶらりぶらり下つて、鰐に一番近い奴が、ありたけのわざを盡して、鰐をからかふ。時々あの恐ろしい顎が閉ぢる。けれども大膽な猿は容易につかまらない。すると猿共は躍り上つて歡呼する。しかし時には、此の輕業師も、螺盤のやうな大きな顎の中に手足をはさまれて、瞬く間に水の中へ引きこまれて了ふ。流石の猿共も、恐れ慄いて、泣き叫びながら、散り散りに遁げて行く。しかしこれにも懲りずに、數日の後、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

若しくば數時間の後には、又同じ此の遊戯をやりに集まつて來る。

　僕は、僕の論旨を進める便宜として、此の三つの話を擧げた。しかし僕とても、かの船頭や、小供や、又は猿の如く、たゞ此の强烈な賭博本能に騙られて、危險の中へ入つて行きたいと云ふのではない。鰐の口もとへ行つて、うまく其の頭を叩いてやらうと云ふ、遊びの爲めの遊びに耽らうと云ふのではない。先きにも言つた如く、僕の此の賭博本能は、此の一種の生活本能は、更に智識本能によつて、訓練された力になつてゐる。たゞ僕は、此等の話に因て、賭博本能即ち冒險本能が、其の生地のまゝ進んで行く時、如何に極端に走つた、馬鹿げた狂熱的の力を持つてゐるかを示せば足りるのだ。

　此の危險の快樂は、更にそして殊に、勝利の快樂を得たい爲めから起る。

　たゞ猛獸狩をする爲めに亞弗利加の奥深く入つて行つた英吉利のバルドキンは、危く獅子に打倒されようとした後に、何故人間は、なんの利益もないこんな事にまで其の生命を賭けるのか、と云ふ問題に對して自ら答へてゐる。『是は私の解決しようとする問題ではない。たゞ私の言ひ得る總ては、よし賞讃してくれる何人のゐない時でも、あらゆる危險を冒して行く苦痛に價する內的滿足を、勝利の中に見出すと云ふ事である。』人間には、何者にでも、動物にでも、勝ちたい、自己の優越を證據立てたいと云ふ、自尊の本能がある。そして此の本能は、勝利の希望のなくなつた後にでも、猶吾々をして、頑固に、決死の戰を續けしめる事がある。

　此の闘爭本能は、戰爭や狩獵に於ける如き人間又は動物に對する闘爭、海や山や又は空中に於けるが如き目に見える自然物に對する闘爭、其他あらゆる種類の困難に於けるが如き目に見えない障害物に對する闘爭、と云ふやうに其の闘爭形式は變つて行く。しかし闘爭本能其者は遂に消滅する事がない。そして其の闘爭は、常に、狂熱的決闘とも云ふべき同一の特性を保存する。即ち其の闘爭が、物的領域から智的領域へ移つても、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

其の熱と幻惑とは些かも失はれない。猶此の闘爭は、更に進んで、全く道德的の領域にまでも移つて行く。即ち諸種の情慾に對する意志の內的闘爭がある。そして其の勝利は無限の歡喜を生ぜしめる。

要するに、人間には、自らの偉大を感じなければならぬ、從つて自らの意志の崇高を自覺しなければならぬ、と云ふ本來の慾望があるのだ。此の自覺は闘爭によつて、自己に對する又は自己の慾望に對する、及び物的又は智的障害物に對する闘爭によつて、始めて獲得される。

そして此の闘爭は、理性の滿足を得んが爲めに、更に何等かの目的をもたなければならぬ。人間は、かの鰐をからかつて遊ぶカンボジヤの猿や、又は單に狩獵の爲めに亞弗利加の蠻地を探險するバルドキンやの行爲を、其の儘に是認するには、あまりに合理的である。冒險の狂熱は、吾々の誰れにも、最も臆病なるものにも、時として存在する。しかし此の冒險本能は更に合理的に働かせられる事を要求する。斯くして此の危險と闘爭との慾望は、理性によつて指導せられる事によつて、しかも此の本能が一定の方向をもたないと云ふ稀れなる本能の一であるだけ、それだけ道德上の重要性を帶びて來る。

快樂を求めて苦痛を避ける事は、云ふまでもなく人間の一本能である。しかし兎角に人間は、他の大なる苦痛には眼をつぶつて、或る小なる快樂に甘んじ且つそれに執着する怠惰性、臆病性をもつてゐる。けれども之れと反對に、尤も此の反對と云ふのはほんの皮相の觀ではあるが、苦痛を通じて更に快樂を求める事も亦、同じく人間の本能である。此の本能が理性の洗禮を受けない時、如何にそれが馬鹿々々しき賭博性に陷いるかは、先きに言つた。そして此の表面上二つの本能が生と云ふメタルの裏表になつて、人間の生活本能とも云ふべきものを形づくる。

科學は、此の前者の本能を滿足すべく、理智によつて創られた。吾々は科學の敎へる正確の領域に於て、出來るだけ苦痛を避けて快樂を求めねばならぬ。又科學の所謂正確領域を益々擴大する事

に努めねばならぬ。然し科學の領域は甚だ狹い。吾々の生活本能は到底此の科學だけで滿足は出來ない。そこで臆斷(スペキユレイシヨン)をやる、哲學(フイロソフアイズ)をやる。且つ彼の科學者にすら、其の根底に於て、必ず何等かの假定がある。斯くして吾々は、此の後者の本能に押されて、未知(アンノウン)の世界に入つて行く。

今僕は、個人對社會の關係に於て、即ち社會に對する個人の態度の問題に於て、此の二つの本能が如何に働くべきかを說いて、僕の此の議論の結論をつけようと思ふ。

個性の發達を全く無視し、且つあらゆる手段を以てそれを抑壓する。今日の社會制度の下に在つては、眞の個人的行動は、其殆んど到處に於て、常に困難と苦痛と危險とに遭はなければならぬ。そして彼の第一本能は、吾々に妥協を命じ、屈辱を强ひる。吾々をして、たゞ生(ヴエジエテエト)きて行くと云ふだけの、生の安全を保たせる。そして吾々には、此のたゞ生(ヴエジエテエト)きて行くと云ふだけの生に對しても、猶猛烈な執着、即ち自己保存本能(イナクチイブ)がある。

けれども吾々は又、こう云つた無爲の生活に堪へられるものでない。些かなりとも自己超越本能を滿足せずに生きてゐられるものでない。そこで吾々の對社會的態度は、常に隙を窺つては冒險的方面に出ようとする。一歩でもいゝ、たゞ生きて行くといふ生活から超越したい。一刻一刻に現在の自己を超越して行きたい。此の種の冒險は、十分道德的に構成せられた個人の、健全なる正則(ノルマル)の行爲である。其處に、吾々の生の、眞の成長、眞の創造がある。そして若し全く其のすきがないと見た時、此の自己超越の本能は、遂に自己保存の本能に打克つて、時として自己犧牲の行爲にまで進む。此の場合の自己犧牲は、もはや、自己の生の單純なる否定ではない。却つて自己の生の崇高なる肯定であると共に、又其の實り多き擴大の豫想である。

■社告■

同人多忙のため八月號を休刊いたします。そして其の代りに、九月號の紙數を倍加して、本誌責任者としての荒畑大杉二名の告別號と爲し、猶同人打揃つて、新らしき事業に赴かんとする二人を送りたいと思ひます。從つて九月號は定價も金二十錢に價上げいたします。

近代思想社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Asia Library

人間の漂流（中）

和氣律次郎

人類が發達の狩獵期にあつた時には、僅かな人口を支持する爲めに廣大な面積が必要であつた。牧養期に進むと衣食の方法が增加したので、一層多くの人口を同じ地面で支持する事が出來た。農業期は更に多くの人口を維持し、今日は機械文明の食物生產力の增加によつて更に更に多くの人口を支へる事が出來る。是は机上の空論ではない。現に十億七千五百萬以上の男、女、子供が存在してゐて素晴しい勢でドンドン增加してゐる。

歐羅巴人の大漂流は盛んに新世界へ向つて流れ込んだ、今も尙流れ込んでゐる。而も歐羅巴の人口は一世紀前には一億七千萬であつたが、今日は五億に達してゐる。この增加率で進んで行くと假に衣食が追ひ越されないものとすると一世紀後には、歐羅巴の人口は十五億になる譯である。一方合衆國に於ける現增加率の三分の一は移民であるが、三分の二は死亡に比して出產の過大なるに原因してゐる。合衆國の人口は一世紀を出でずして五億に達するであらう。

人類、—飢餓動物、—殺戮者は常に空所の缺乏に苦しんだ。世界は漫性的に群集過多である。一平方哩に五百七十二人の人口を有してゐる白耳義は石器時代に僅か五百人しか支へてゐなかつた丁抹以上に群集してはゐない。ウッドラフ氏の說によれば、耕作地は狩獵地の千六百倍の食物を生產するといふ。ノルマン征服の時から數世紀間歐羅巴は一平方哩に二十五人しか支へる事が出來なかつた。今日歐羅巴は一平方哩に八十一人を支へてゐる。これはノルマン征服以後數世紀間は、歐羅巴の人口が飽和されてゐたからである。斯くて商業と資本家制度の發達、新領土の探檢と開拓は勞働を省く機械の發明と科學的原理の發見と應用と共に、歐羅巴の食物生產力を著しく增加せしめた。そこで忽ち人口が增加した。

千六百五十九年の愛蘭土の國勢調査によれば、その國の人口は五十萬であつた。百五十年後には八百萬となつた。日本の人口も長い間一向增加し

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

なかつた。食物生産力を増進する方法がないやうに見えたのである。然るに六十年前に提督ペリィが日本の門戸を開放せしめて西歐の勝れたる食物生産力の知識と機械とを入れた。この衣食の膨脹に連れて人口が増加しだした。而して人口が再び衣食を壓迫しつつある事を發見するに至つて日本が、刀劍を手にして船に乘込み更に空所を求める爲めに西方漂流に出發したのは最近の事である。斯くして日本は臺灣と朝鮮とを切取り、その漂流の前衛を遙か滿洲の內地へまで流れ込ました。

非常に長い間支那の人口は四億を出なかつた—それが飽和に大であつた。黄河が一定の時期毎に數百萬の支那人を溺死せしめる唯一の理由は、これらの數百萬人には他に耕作すべき土地がないからである。而かも斯かる災禍の後には人間の生命の波が押寄せて來て新らしい數百萬人がその危險な地方に溢れるのである。彼等は衣食に壓迫せられてそこへ追ひやられたのである。日本の如く早晩支那も西歐の勝れた食物生産力を學んで應用するに違ひない。その時期が來れば、支那の人口が非常に増加して遂に飽和點に達すべきことも明らかである。その時西歐思想に感染せる支那は、日本の如く刀劍を手にして更に空所を求めるべく非常な漂流を始めはしないだらうか？これが所謂黄禍といふ評判の妖怪である。然し支那人も人間である、他の種族と別に變りはない。有史以來、有ゆる人間は食物を求めて、あちらこちらと地球上到る所を漂流した。他の人間のした事を、支那人のみはしてはいけないのであらうか？

然し人間の事物には久しい以前から一つの變化が起りつつある。强い種族が地球上の空所を得る爲めに、弱い種族の間へ侵略して行つた最近の漂流は、平和を齎らした、廣く一層永續的の平和を齎らした。弱い種族は死刑に對する恐怖から、彼等の武器を捨てて仲間同志の殺戮を止めなければならなくなつた。頭皮を剝ぐ印度人や首狩りをするメラチシア人は或は滅され或は民法や刑法上の罰といふ優れた力に信賴するやうに改宗した。地球は征服せられた。野性のもの及び有害なる者は馴され或は絕滅せられた。肉食獸や食人種は勿論の事、顯微鏡的有機物に至る迄も決して容捨はしない。亞弗利加に於る戰爭好きの砂漠人種も、バ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ナマの如き疫癘瘴氣の巢窟も、敵の地方は日に日に開拓されて人類の棲息に適する平和な土地は愈擴大されて行くのである。合衆國や英國や獨逸に現存して常に家庭にのみある人々の中の何割が直接に戰爭を見、直接に戰爭を知つてゐるだらう?

戰爭は漸次廢つてゐる。兵卒になる方が勞働者になるよりも安全である。現に戰鬪しつゝある隊にゐる方が、工場や鑛山にゐるよりも生き得る機會が多い。殺人法としては戰爭は追々無能になつて來た。而かも今日の如く戰爭の機械が高價で恐ろしい事は曾てなかつた。今日平和の時に於ける軍備は、昔の戰時に於る費用よりも高價である。常備軍を支へる費用は一帝國を征服するに必要な費用よりも多く掛かる。殺す爲めの準備の方が殺す事の費用よりも高價である。ドレツドノオト型戰鬪艦一隻の費用は、ザアクセスの全軍隊に殺人の武器を供給するに足る。近代の艦体の砲擊は一頭の驢馬を殺す位が落ちである。二十世紀に於ける二强國間の戰爭の死傷者數は、鐵工場の職工を羨望に堪へざらしめる。戰爭は洒落になつた。今日の衣食は夥しい、生命は安くない、現今の機械力を以てする殺戮に耽る事は肉と血との性ではない。これは空論ではない。南亞弗利加戰爭や米西戰爭に從軍した人員及び戰死者數と、南北戰爭やナポレオン戰爭のそれとを比較すれば思ひ半ばに過ぐるものがある。

戰爭が進化によつて無用化したのみならず、人間も偉大な智慧と高大な倫理とを以つて戰爭に反對してゐる。人間は何もかも知つて了つた。戰爭は人間の常識に悖るものである。

人間は戰爭の惡い事馬鹿らしい事及び頗る費用の掛かる事を覺つた。蒙つた損害と成就せられた結果とは價格に足らない。人間は丁度個人同士の爭に血の爭鬪よりも民事裁判所の仲裁の方が更に實際的であるやうに、國民間の爭に於ても仲裁が一層實際的であるといふ事を斷定した。

戰爭は消滅しつゝある、病は征服されつゝある、而して人間の食物生産力は增加しつゝある。是れ等の諸原因が今日地球上に十億七千五百萬の人間の棲息する所以である。是れ等の原因の爲めに世界の人口は間もなく二十億となり更に速に三十億に達せんとするのである。人間一代の壽命は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

確實に增加しつゝある。今日人間は昔よりも長生をする。生命は決して覺束なくはない。新らしく生れる赤子は過去に於ける何れの時代よりも大なる生存の機會を有してゐる。外科術と衛生とは生命の禍患に伴ふ致命と病の蹂躪とを減退する。過去にあつては直に滅亡の因となるべき缺陷や弱點を有する男女が今日は生存してゐて、父母として無數の子孫を生む。食物生產力が多くなればなる程人々もそれに連れて多くなるべきである。生命の『測る可からざる生殖力』は少しも變らない。食物を與へれば生命は增加する。今日生きてゐる十億七千五百萬の幾百分の一は生れ樣とする生命の喧噪を沈默せしめるかも知れない。然しそれは僅に一小部分に過ぎない。此點に關しては人間獸の生命は殆んど他の動物の生命と相異はない。

更に他の一つの變化が人間の事物に現はれつゝある。政治家は切齒して呪咀の聲を擧げ、過度の書籍は學問が結晶せる偏見によつて毀損せられてゐる人々は、文明は破碎すべしと力說する共、世界を通じて社會の趨勢は社會主義に向つてゐる。古い個人主義は消滅しつゝある。國家はこれまで神聖な私の事件とのみ考へられてゐた事物に對しても漸次干涉しやうとする。これを要するに社會主義とは、更に多數の人間に食ふべき食物を得せしめんとする新らしい經濟的政治的組織に過ぎない。一言にして云へば社會主義は改良されたる食物生產力である。

それのみならず社會主義は、單に一層容易に一層多量に食物を得るのみならず、其食物を一層均等に分配せしむるものである。社會主義は一時凡ての男、女、子供に有ゆる食ひ度い物を與へ且彼等が欲するが儘に何時でも食ふ事の出來る樣にすると約束する。衣食は一時の間遙か彼方へ押遣られて了ふ。其結果として生命の洪水は滿潮の如く上るであらう。結婚が多くなり子供が多く生れる。今日數百萬人に依て行はれてゐる强制的避妊は全然跡を絕つであらう。又今日貧民窟や勞働區にゐて漫性的營養不良と群集過多に原因する有ゆる病氣の爲に死亡し、彼等の多產を殆んど認められずして死亡してゐる數百萬人も、社會主義の增加せる食物生產力が凡て彼等の食はんとする物を與へる將來に於ては決して死亡しないであらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

胡麻鹽頭

遊六

■前號に失敬したから今度は必ず何か書く積りで居たが、其日〳〵の商賣物に追はれて矢張りさうも思ふに任せぬ。

■所が今朝屆いた新刊物、郡山經堂君譯『新聞記者の生立の記』の巻頭に、『大阪に於ける僕の記者生活』と題する、僕の序文見たような者が載つて居るから、同書の提灯持ちかたがた、其中の數節を左に抄錄してお茶を濁しておく。

■『明治二十二三四年頃、僕が二十歳あまりの時、僕は大阪天王寺の小學校で英語の先生を勤めて居た。其時僕の兄の本吉欠伸は既にへぼ記者になつて居たので、僕も自然少しづゝ其の社會の人達と交際する事になつたが、何しろ學校の先生が厭で厭で堪らずに居る僕の眼には、それらの新聞記者の自由な、快活な、放縱な生活が羨ましくて堪らなかつた。

■『或時、大阪日々新聞の主筆たる奥山勿來君に新町の觴船で夕飯をおごられた時、酒の醉と共に大いに平生の感慨を催して、しみ〴〵新聞記者になりたいといふ志を奥山君に告げた。すると奥山君は無雜作に、何アに、新聞記者なんぞになるのは譯のない事ですと云つたきり、僕の感慨などはサツパリ氣にも止めず、鼻をクス〳〵云はせながら(是は勿來君の癖)更に酒をあふつて、タワイもない馬鹿話で獨り興に入つて居た。

■『所が成程、奥山君の云つた通り、それから間もなく僕は朝日新聞の西村天囚君の世話で、譯もなく大阪毎朝新聞の記者になつて、月給十五圓頂戴する事になつた。……

■『兎にかく僕は是で新聞記者に成りすまして、小説を書いたり雜報を書いたりして居たが、或日編輯局の裏の大便所に行つた時、「今度來た堺と云ふ奴ほど生意氣な奴は天下に無い」といふような落書のしてあるのを見つけた。生意氣は固より百も承知の事であるから、こんな落書なんぞ却つて得意の度を增す位のものであつたが、入社後僅かに二ヶ月の後、突然、自今出社に及ばずといふ親展書が自宅に舞込んだ時には、僕もさすがに餘り得意ではなかつた。……

■『すると又もや天囚君の世話に依つて、今度は「毎朝」の後身なる「新涙華」の編輯局に入る事となつた。所が、永々涙々の身の上とあつて、初めての出社に着用すべき羽織がない。どうしたものかと思つて居ると、大抵そこらの事情を察した天囚君が、古着物の紬の羽織を一着細君に買はせて、態々それを持たせてよこして吳れた。云ふ迄もなく僕は大いに感激して、前の句は忘れたが「何とかの何とか何とかした薄羽織、人の情の厚くもあるかな」といふような古風の歌を作つたりして、早速それを着用に及んで出仕した。……

■『然し青二才の僕が得々として首席に座つて居た位であるから、「新涙華」新聞の微々たるを亦盖し想ふべしで、編輯局員の多くは大抵十圓內外の御手當で、甚だしきは六圓といふ月給取もあつた。所が、おかしい事には其の六七圓取る記者の中に、たしか相場係の人だつたと思ふが、一人不思議にも小金を持つて居た人があつて、僕等は小使が無くなると、いつでも月給受取の委任狀を書いて、一割の天引で其人から金を借りた。社の會計はいつも火の車で、前借などは以ての外といふ有樣であつたので、編輯局員は大抵皆んな、いつの間にやら此の相場係員のお世話になつた。それで月末になると、編輯局の月給は大部分一纏めにし

て此人が會計から受取る事になつて居た。

■『其頃「新浪華」の編輯局に居た人で今大分エラクなつて居るのは加賀卯之吉君である。加賀君は今三重縣選出の代議士で、前期の議會開會中、誰やらに撲られたお蔭を以て有名になつた人であるが、その加賀君も當時は一個の探訪に過ぎなかつた。尤も此の探訪といふ者は、今日では外勤記者と改稱されて、大いに其の品位面目を高めて居る譯だが、何しろ當時にあつては餘り振つた地位ではなかつた。

■『現に大阪朝日の小川定次君の如きは、記者といふ譯にも行かぬが、さりとて探訪と目するも氣の毒と云ふので、「紀淡海峽」といふ綽名が附いて居たような次第である。

■『然し加賀君は地位こそ低かつたが、僕等の樣な貧的ではなく、後に立身する樣な人物だけあつて、其時から何をどうして居たか知らぬが、兎にかく中々工面がよく、始終ピカ〳〵した羽織など着て居た。そして僕が同君に就いて記憶して居るのは、同君がよく編輯局の眞中で仰向に寢ころんで、足をバタ〳〵させながら馬鹿を云つては無邪氣な高笑をして居た事である。……

■『こんな馬鹿話をすればまだいくらでもある。今は朝日の元老株になつて居る木崎好尙君が、大の饅飯好で、マン一回に饅一杯と云つた事だの、渡邊霞亭君が約一年に一軒づゝ別宅をふやしたといふ事だの、思ひ出だせば隨分其頃の記者生活は無邪氣なものであつた。

■『ついでにモ一つ是非書いて置きたいのは吉弘白眼君の事である。吉弘君は當時いづれの新聞にも屬して居らず、又純粹の記者といふ側でもなく、寧ろ新聞經營の空想家であつたが、其頃の貧乏は僕等と兄たり難く弟たり難く、お互ひ北野の九階の近傍に住んで、米を一升づゝ借りたり貸したり一枚の羽織を二人で着たりしたものであつた。尤も吉弘君は其頃から聊か親分肌があつて、自分が碌に食へぬ癖に、居候の二人も（而も自分よりは年上の奴を）ゴロ〳〵遊ばせて置くといふ風であつた。今日彼が惡弘黑眼の異名を得ながら、大阪日報社長兼大阪日々新聞社主として盛んに幅を利かせて居るのは、二十年前の昔に於いて既に其兆を示して居たのである。……

■『然し是だけでは此の文章の結末が甚だ振はないから、更に數行の文字を書き添へる。扨僕はいよ〳〵東京に向つて出發する事になつた。いよ〳〵今日の午後梅田から汽車に乘るといふので、賣殘りのガラクタ道具の荷造をして居る處に、突然家主が乘りこんで來た。無理もない、家賃が數ヶ月分滯つて居たのである。家主たる者に一言の通知もなくして立退くとは怪しからぬと云ふので、家主大いに立腹する。仕方がないのでとう〳〵夜具の一包を家主に引渡して、命から〴〵大阪の地を引揚げた。先はめでたし〳〵。』

■大杉、荒畑の兩君が近々新しい事業に着手すると云ふので寄附金募集の事を發表した。僕の如き多年安逸を貪つて居る者は、兩君の如き常に勇ましく活動して居る者に對して、慚愧の至であるので、せめて少々寄附金の募集にでも應じようと心がけて居るが、それも又中々心に任せないで困つて居る。

■賣文社は移轉以後稍安固なる財政狀態に立つて、只管商賣大事に勸めて居る。天道人を殺さず、世間は猶僕に相當の飯を食はせて吳れる。

Asia Librar

銅貨や銀貨で

榮

■八年ばかり以前、日刊平民新聞の創刊號に僕は『ル・レヴオルテ發刊の記』と題して、クロポトキンの自叙傳の一節を譯載した事があつた。僕は今、僕等の新計畫たる勞働雜誌の發刊について、再びあの記事の事實を思ひ出す。

■『吾々は此の新聞を始めるのに、資本金としては僅に二十五法しかなかつた。そこで吾々は先づ、皆んなして前金を集める事に奔走して、兎も角も第一號を出し得る事となつた。新聞は表面甚だ温和なものであつたけれど、其底には又甚だ革命的なものがあつた。』僕は、此の一項によつて、吾々の同志の新聞雜誌がいつでもそしてどこにでも、殆んど資金といふ資金もなしに、たゞ同志の熱心だけで出來上つた事と、又強權からの迫害を避ける爲めに、編輯者が如何に無駄骨折をしたかと云ふ事とに、今更ながら強い感激を覺えさせられる。

■『そして丁度第五號を出したばかりの時であつた。活版所から、何處か他の印刷所で印刷をしてくれと云つて來た。勞働者は憲法に規定せられた其の言論の自由も、法律の明文以外の種々なる檢束に遭ふ。瑞西では國中の印刷所は、皆な政府の統計報告書や何かを印刷して、漸くに存立して行く事が出來たのであつた。そして吾々の印刷所は、若し此の新聞を印刷すれば、政府の印刷物は一枚も註文をせぬと云ふ、頗る嚴重な言渡を受けたのであつた。そこで私は、佛語瑞西の到處を駈け廻つて、印刷所を頼んで歩いたが、何處へ行つても、私共は政府の御註文が無ければ到底生きて行く事が出來ませぬ。それに此のル・レヴオルテの印刷を受合へば、すぐに其の御註文が無くなるのでございます」と版に押したやうに答へられるのであつた。』僕は、近代思想創刊の當時、單に僕等が無政府主義者であると云ふ事の爲に、十數軒の印刷所からことわられて、遂に或る友人の厚意で、漸くの事で窃に初號を刷つて貰つた事を思ひ起す。しかしこんどは、これだけは何うやら無事に行くらしい。

■『私は、絶望して、ヂユネーヴに歸つて來た。然るに、仲間のヂユヌルスリーは、至つて平氣な、元氣な顔をして言ふ。三ヶ月の信用借で器械を買はうぢやないか。三月すれば金も拂へるに違いない。私は「併し金と云つても、今の所、僅に二三百法ばかりあるだけぢやないか」と氣遣ふ。すると彼は「金? 馬鹿な、すぐに出來るよ。先づ字母だけを注文しやう。そして次の號を早く出さう。さうすれば金はすぐに來るよ」と言ふ。果してさうだつた。此のヂユラ印刷所から始めて新聞が刷り出されて、吾々の困難が訴へらるゝや否や、すぐに金は來た。其多くは銅貨や銀貨であつたが、兎も角も金はすぐに來た。』僕は、此の銅貨や銀貨でと云ふ文字を、涙なしに讀む事は出來ない。僕等のこんどの寄附金募集も、若し此の銅貨や銀貨で集まつてくれたら、僕等は、たゞそれだけの事實に對しても、僕等の生命を捧げる事が出來ようと思ふ。

■『私は、新主義の黨派が、常に金に困る困ると呟いてゐるのを聞く。しかし私は、眞の困難は金の缺乏よりも人の缺乏であると云ふ事を、年と共に感じて來た。眞の困難は、確乎不拔の精神を以て目的に一直線に進んで行く、そして他の人々を導いて行く人の缺乏である。或る一事業に其の全精力を盡す人があれば、金は自然に集まつて來る。吾々の印刷費も、多くは勞働者の寄

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

附金によつて、兎も角も不足を告げずにやつて行けた。外の事業でも同じ事であらうが、新聞には、金よりも人が最も重要なものだ。『此の人の缺乏と云ふ事は、目下の僕等の間にも、矢張り悲しむべき事實なのだそして今自ら新しい仕事に當らうと云ふ僕等も、甚だお恥かしい次第ではあるが、僕等自身を其人であると云ふ十分な自信はない。僕等はたゞ熱心なる勞働者諸君からの激勵によつて、僕等自身の小なる力を常に擴充さして行きたい。

■僕等は既に、僕等の新事業の計畫發表以來、幾多の同志諸君からの激勵を受けた。そしてそれと同時に又、文壇の二三の友人は、僕等の計畫に對する同情ある批評を公けにしてくれた。僕は『第三帝國』の野村善兵衛君、『反響』の生田長江君、『早稲田文學』の相馬御風君等に對して、深く感謝する。そして此の機會を利用して、此等の進歩的思想家諸君に、一言のご挨拶をして置きたい。

■僕等自身に對する文壇諸君の理解を求めると云ふ事は、『近代思想』の小なる目的の一つであつた。尤も僕等の腹の奥底をさらけ出せば、諸君の如き中等社會の知識者に對しては、甚だ失禮な云ひぶんではあるが、僕等は殆んど何等の、と云つては少し云ひ過ぎるかも知れんが、兎も角も大した希望はもつてゐない。僕等の本當の仕事は主としてたゞ、僕等自身の多少の自己完成と勞働階級の自覺と、及び僕等自身に對する勞働階級の理解とに在る。けれども諸君と同じ中等社會出の僕等には、猶諸君の間に多少の未練が殘つてゐる。此中等階級の中から既に立派に勞働階級の中へ入つて了つた少數者の實例を見、又自らも其の少數者の一人たらんとしてゐる僕等に取つては、どうしても此の未練が、まだ諸君の間から離れない。よし諸君の間の幾人かを僕等の道連にする事が出來ないとしても、せめては僕等が勞働階級の中へ入つて行く氣持だけでも、諸君に理解して貰ひたかつた。『近代思想』創刊の當時は、そして今も猶周圍の事情は幾何も進んではゐないのであるが、僕等は公然の手段をとつて、勞働階級の自覺や、又僕等に對する其理解を要求する事を許されない事情があつた。そこで僕等は勞働階級の代りに中等社會の知識者に向つて、其の社會的反省と自覺とを促し、又僕等に對する其の理解を求めたのであつた。

■僕等の此の目的は可なりの程度にまで達せられた。殆んど個人的興味にのみ溺れてゐた文壇の形勢は、多少の社會的興味に傾いて來た。素より之れは僕等及び他の文壇の進歩的思想家諸君の力ばかりではない。其の可能的要素が、既に思想界の中に含まれてゐ、且つ種々なる社會的出來事の影響があつた事は爭はれない。そして僕等及び諸君はたゞそれを促進さす一役目を勤めたのに過ぎない。しかし僕等は、此の僕等自身の役目に就いて、隨分直接及び間接の働きをした積りでゐる。

■けれども要するに中等社會は、資本家階級と平民階級との階級鬪爭に於て、一般に資本家の手助けをするか、或は少なくとも此の鬪爭の邪魔者になるかの、社會的性質を帶びたものだ。此の中等社會に永く踏みとゞまつてゐる事は、僕等自身の本意でもなく、又踏みとゞまればとゞまる程、僕等は僕等自身の生の危險を感ずる。勿論此の議論に就いては、諸君と僕等との間に、猶餘程の距離がある。しかしそれは今こゝで論ずるひまがない。ただ僕等は僕等の自然事だと信ずる方へ行く。諸君も亦諸君の所信に從つて、奮鬪せられる事と信ずる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

僧と惡魔

—ダヌタエフスキイ—

和氣律次郎

『オイ、小さな肥つた和尙さん。』惡魔は僧に向つて云つた。『なぜお前は、あの可哀相な迷はされてゐる人間に嘘を突いたのだ？地獄にどんな苛責があると云つてゐたのだ　あいつ等はモウ此世にゐる間から、地獄の苛責を受けて苦しんでゐるのが分らないのか？お前や政府の役人共は皆此世に於ける俺の手下だといふ事が分らないのか？あいつ等を嚇かして地獄の苦しみを見せるのは、お前の仕業だ。お前にはこの事が分らないのか？よし、ぢやあ俺と一緒に來い！』

惡魔は僧の頸筋を摑んで宙に吊し、彼を鐵工場へ連れて行つた。彼は職工が忙しさうにあちらこちらと走り廻つて、燒けるやうな熱の中で一生懸命に働いてゐるのを見た。直に僧は、濁つた重々しい空氣と熱とに堪へられなくなつた。彼は兩眼に涙を浮べて惡魔に懇願した。『私を行かしてくれ！この地獄から出さしてくれ！』

『いや、親愛なるお友達。俺はモットいろんな塲所を、お目に掛けなくてはならない。』惡魔は再び彼を捕へて農塲へ引摺つて行つた。彼は勞働者が穀物を打つてゐるのを見た。埃と熱とで苦しさに堪へられなかつた。監督は笞を持つてゐて、烈しい勞働と饑さの爲めに地上に倒れた者を、容赦なくビシ〳〵叩いた。

次に僧は、これ等の勞働者の一家が住んでゐる、不潔な寒い煙い惡臭のする穴へ連れて行かれた。惡魔は冷笑した。彼はここに於ける貧窮と辛苦とを指示した。

『何うだ、未だ足りないか！』彼は訊く。彼惡魔ですらも、これらの人間を憐れむやうである。敬虔なる神の下僕は見るに堪へなかつた。兩手を高く擧げて彼は歎願する。『ここから外へやつてくれ。全くだ、全くだ。これが此世の地獄だ。』

『では分つたな。それにお前は尙外に地獄があるなどと、あいつ等に斷言してゐるのだ。お前はあいつ等を苦しめてゐる、もう肉體的には全く死んでゐるあいつ等を、精神的に殺す程苦しめてゐる！　サア來いモウ一つ地獄を見せてやる――モ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ウ一つ最もひどい奴を。』

彼は僧を監獄へ連れて行つて、土牢を見せた。不潔な空氣の中には、あらゆる健康と活動力とを奪はれた人間の身体が、床の上に横はつてゐた。彼等の哀れな裸の瘦せ衰へた身体には、蚤や虱が一杯たかつて、その肉や血を貪ぼつてゐた。

『お前の着てゐる絹の着物を脫いで了へ。』惡魔は僧に向つて云つた。『これらの不幸な奴等がやつてるやうに、お前の踝に重い鎖を付けて、冷たいむさくろしい床の上に横になれ――さうして奴等を待ち受けてゐるモウ一つの地獄の話をしろ！』

『いや、いや。』僧は答へた。『これよりも恐ろしい物があらうとは思はれない。何卒後生だからこゝから出してくれ！』

『その通りだ、これが地獄だ。これよりもひどい地獄のありやうはない。お前はそれが分らなかつたのか？お前が未來の地獄を說いて嚇かしてゐたこれらの男や女は、生きてる中から斯ういふ眞の地獄にゐるのが分らなかつたのか？』

大久保より

榮

■『日本人に大杉榮と云ふ馬鹿者がある』と云ふのを冒頭として、僕及び所謂『大杉一派』を盛に嘲罵した、『新潮』の中村武羅夫君が、一昨日のひるすぎ生田長江君と一緒に、僕を訪れて來た。寒村も折よく居合せる。『實は久しく欲しい欲しいと思つてゐた籐椅子が買へないでゐる所へ、「籐椅子の上で」なぞと云ふみだしが出たものだから、ついムツと癪にさはつて了つて……』と云ふやうな話から、とう〳〵九時間ばかり話がはづんだ。

■夜の十時頃に二人が歸つて、やがて三十分ばかりすると、ガヤガヤ騷ぎながら、表の戶をドンドン叩きつけて『こいつが社會主義の大杉だ、馬鹿ッ』と怒鳴る聲がする。それを聞くや否や、『コラ待て』と一喝しながら、寒村がまつさきに飛出す、續いて百瀨と僕とが飛び出す、向うも三人だが、一人は醉ばらつて管を卷いてゐるが、他の二人は其男を抑へながら切りに謝る。『なんだ一合や二合のハシタ酒に醉つぱらやがつて……しかし貴樣等だつて同罪だ。二人もゐてとめる事の出來ぬ筈があるか。』寒村は櫻の木の太い棍棒のやうなステッキを振上げて向つて行く。しかし向うはたゞ謝るので其の棒の下ろしやうもない。其處へ始めて僕が口を出して、一人の男の前へ進み出て、『僕が大杉だ』と名のる。向うは法學士何の誰とか云ふ名刺を出して、『何れ二三日中におわびに上ります』と云ふので、事はおさまつた。（二十五日）

癈兵救慰會

荒川義英

今度、陸軍豫備歩兵中佐勝田勇三氏の郊外の新宅落成と同時に、その門に『癈兵救慰會本部』と云ふ大きな札が掛かつた。

中佐は無口な方で、一文字に結んだ口と、黒白のくつきり交つた髯とは、正しく彼が好勇將であつた事を語るに足る。けれ共、勇將も奸臣のために退けられたのか、少佐を一期として名譽昇進の中佐として、豫備役編入の命を蒙つた。當時彼はあまり家中の者とも語り合はなかつたが、次第にそれも改まつて、元に似たやう元氣な顏に立ちかへつた。

彼自身以外にも、彼の豫備役編入を帝國陸軍のために憤つたものがあると云ふ。けれ共、それは自から語るが故に、彼の子供や妻が信じた事實であつた。

それから二三年過ぎた頃、彼は舊友某のすゝめによつて、恩給を擔保として若干の金を調達して私かに期米に手を出してみた。所が最初よかつた結果は忽ち破れて、彼は泣くにも泣けない姿で、書齋に閉ぢこもる事になつた。（泣けない理由は彼は百卒の將として、千軍萬馬の間を駈け廻つた程の勇將であつたからである。當時の戰時畫報には、彼の拔刀敵に迫つた勇姿が、畫伯の筆で寫眞に代へられてゐた。）

けれ共、中佐はそんな事で勇氣の挫けるやうな薄志な人ではなかつた。彼はその後よく妻と子とを携へて奮闘した。

十年は夢のやうに過ぎた。果して『闘ふ者を自然は見すてない』とか云ふ彼の常の信條に叛かず彼に運は向いて來た。

『是だからそう人を見くびるものではない、現役でゐる奴等の妻はお前より何れだけ好いものを着てゐる？え？　オイ。』斯う云つた中佐の顏は圓滿であつた。勿論細君はなほ圓滿であつた。然かも今度の彼の成功は、世のそれのごとく、浮薄な濡れ手で粟の掴み取り的なものではなかつた。中

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

佐のは堂々去る友人の財産を、世の需用者の希望に任せて貸し與へる仲介といふ、全く正しい方策の結果であつた。東西へと日々夜々奔走した努力の結晶であつた。

すると、中佐はもう日々の餘暇を些しでも徒費するのを惜んで、丁度好い時機として積年の理想が漸やく實現の歩に就く事になつた。『武士は物の哀れを知』つてゐた。書齋に掛つてゐる『仁者有勇勇者必不仁』と大書した六朝風の書額は、實に彼の人格の表現に外ならなかつた。

で、彼はいよ〳〵積年の希望、幼なき頃よりの抱負たる癈兵救濟の大義に赴いたのである。

『衣食足つて禮節を知ると申しますな、いや私共も衣食が足りませんで、一向どうも不愉快な事を敢て――まあ敢てゞありますな――して過して來たのです、まあ今日ぢや何うかこうか、ハヽヽ、、、、それで私等が此の擧に出でたのは、別に賞すべき事では全然御座いません、まあ當然の事を思うてやるつもりであります。』

いよ〳〵『癈兵救慰會』の創立會のとき、食卓をとりまく四五の同志の前で、中佐は斯う言つた。

いろ〳〵な風采の人々が、本部の門をくゞつた。片腕ないもの、片足ない者、唇に銃丸をうけて、一寸見ると口が耳まで裂けたやうになつた者、何れも皆、昔年の忠臣であり勇卒であつた。そう云ふ人々が、次第に世の人々から忘れられるのは、中佐の云ふ通り全く憂ふべき現象であつた。自から進んで國民の犧牲となつた人々の、此の哀れな狀態を知らず顔の衆愚と比して、何處に中佐の先見を否定する者があらう。實に中佐自ら先見と云ふに對して、嘲笑ふ者などはある筈がないのである。

玄關の横が立派な應接間だ。近在からわざ〳〵出て來た癈兵等は、皆その立派な邸宅と、その西洋間の飾りつけとに驚歎する。然かも中佐親しく其處に現れて、其處で應對した。

『貴郎は何方から?』

中佐殿が一兵卒に向つて、貴郎と言はれるのである。その男は忽ち椅子をはなれて片足と腋杖さで直立した。

『はあッ。』

『足がお惡いやうぢやな、いや立たんでも好い、

立たんでも好い、もう此處は隊ではないからな。』

中佐は大きく笑つた。

『手前は埼玉でございます、――得利寺の戰ひに、へえ。』

『ははあ得利寺、大隊長は誰方ぢやつたな？』

『突貫少佐殿でありました。』

『突貫君なら士官學校での同期ぢや、戰爭には無暗に強い男でな、ハ、、、、、。』

『左樣でございます。』

斯うして中佐は、二十分近くも必ず對談される。そうしてその男が此の門を再び出たときは、白い看護服に、大黒帽に赤の十字の附いたのを冠り、大きな鞄を肩にしてゐた。そうして始めは、輕く兩腋杖でスッスッと風を切つて、兩脚の滿足な人よりも早く歩いた。中佐に命ぜられた通り、一軒の家へ入る。胸がおどる。

『御免下さいまし。』

中々人が出て來ない。

『御免下さいまし。』

『はい』と若い細君が現はれた。

『何うも御たゝせ致しまして失禮でございますが、私は日露戰役の際、得利寺に於きまして、足をとられました者でございます。御買ひ置きはございませうが、何うぞ一つ何なりとお救ひ下さるおつもりで、お求め下さいまし。へい、藥種と化粧品でございます。』

細君は苦い顏して、言ひ終るのを待つてゐたが、

『あゝ貴郎、そう出して並べて下さいますな、何方によらず、そう云ふお方はお斷はり申せと、宅が申して出ますのでございますから。』

廢兵は此處だと思つて、

『其處はどうぞ一つ、貴女樣のおぼしめしで、何なりと一つ。』

『失禮ですがお斷はりします。』

出した藥をバッ〳〵わるくしまつて外へ出た。顏に火がつくやうにほてる。『あゝ、また此の次も、あゝだつたら何うしやう。』けれ共、若し中佐の言の如く行くなら、一年にして相當な貯金もできるわけだ。と、再び勇を鼓して歩き出した。

夕暮近く、男は中佐邸へ入つた。足が棒のやうになつた。兩腋が一足、一足、歩くたびに、皮がむけてゐるかと思ふ程ピリ〳〵する。賣上高一圓

八十五錢。うち仁丹が四十錢。御園化粧品が八十錢、その他、割の好い無名の賣薬は殆んど賣れなかつた。中佐自製にかゝる軍國丸、救國散、富國齒みがきなどいふものは、一つとして賣れてゐない。

『よう御苦勞々々、時にどうぢやつたな、ははあ一圓八十五錢、それに御園や仁丹がそう多くては……』と中佐は云つて元氣に笑つた。事務員がパチ〳〵と算盤をはぢく。

『二十七錢。』

その聲をきいて、男は泣きたくなつた。と見ると、中佐の姿が其處には見えない。

『中佐殿は？』

『中佐殿か？』事務員は一寸笑つて、

『御主人は奥へ行かれた。二十七錢ありや優に一夜を明かせる。△○町——通りへ出て左へ十丁程行くと直きわかる。其處が好いだらう。あんた達の仲間はたくさん泊つてゐる筈だ。』

男は外へ出て茫然とした。今朝國から出たとき着てゐた着物の包みをかゝへて、敎へられた路を行つた。今朝十五圓持つて出たのが、十圓の保證金と汽車賃雜費をさし引いて、殘りが三圓四十何錢、それに二十七錢を加へて計算してみた。又涙がにぢんで來た。

中佐の慈善事業は着々として成功した。救はれ慰められた多くの廢兵達は、わずかに得た一日の勞役の賜物を、その夜濁酒に代へる者が大部分であつた。木賃宿の薄暗いランプの下に、赤い醉顔は力なく笑つた。その笑ひは、中佐に對する感謝と滿足とであつた。

『廢兵救慰會本部』の門は、なほ毎日二三人づゝの舊勇士を呑んだ。けれ共中佐は言つた。

『統計上、まだまだ廢兵は此の近在にゐる筈だ是では計畫通り救へない。』そうして今までよりは些し大きい廣告を新聞に出した。

■ 未來社主催音樂會 ■

七月十二日夕七時より丸の内帝國劇場裏保險協會にて新歸朝の音樂家山田耕作氏のために未來社主催の『リーダー・アーベント』を開く。氏の獨唱曲は、シウマン、シウベルト、ベートヴエン、チヤイコヴスキー、リヒアルトシトラウス、ヴグナー等の二十餘曲。伴奏は貫名美名彦氏、會費は一圓、申込は日本橋檜物町東雲堂宛のこと。

新刊

榮

■世の中（三宅雄二郎著）

眞理は平凡にあるとか、中庸にあるとか云ふ事を、萬事にあてはめて、甲でもない乙でもない、しかし甲でもある乙でもあると云ふ風に議論するのが、由來此人の癖だ。從つて此の人には創見がない。若し世間で云ふやうに此の人を學者だとすれば、僕に云はせれば、編輯屋的學者だ。素より綜合と云ふ程のえらい所はない。これは、一時大ぶ世間でもてはやされた『宇宙』なぞを見ても、すぐに分る事だ。盲千人のお目出度い此の日本の國だからこそ、此の人も、哲學者だかとか何んとか云ふつまらぬ浮名を流したのだ。

しかし斯う云ふ常識的の人は、しかも多少の進歩的思想もあり、且つ物識りでもある人は、此の『世の中』と云ふやうな處世訓めいたものを取扱ふと、いかにもお手に入つたものである。少しもソツがない。手あたり次第に東西古今のアネクドトをひつぱり出して來て、右から左へ、左から右へ、些かの拔目もなく議論を進めて行く。加ふるに、多少の癖はあるにしても、其平明な文章は、よどみなく、すらすらと流れて行く。論旨も、極めて常識的であるだけそれだけ、一寸點のうち所はない。尤もこれはあの『宇宙』に就いても、同樣に云へる事ではあるが、しかしそれはただ好編輯屋としての技倆に過ぎない。先きにも云つたやうに本當の學者としての技倆ではない。何れにしても此の人は、あまり利口でない靑年にとつての、一寸まれな、いゝおぢさんだと云ふ事には論があるまい。

けれども常識屋は、しかも此の人のやうな偉大らしい常識屋と雖も、一寸其の人の常識を超えた事になると、すぐに的はづれの妙な議論に陷つて了ふ。たとへば此の『世の中』にある一篇の、僕等の友人若しくば僕等自身に關した、『大逆事件の敎訓』を見ても、すぐに其のまぬけさ加減が窺はれる。『兇徒は一概に狂者と認め難し』てな分りきつた事を冒頭として、『渠等の思想に間違つた所あるに相違ないが、間違ふやうになつた事情も尋ねゝばならん』とあつて、先づ第一に其の責を閣臣に歸し、『大權の發動』とか『陛下の思召だ』とか云つて『何事も至尊の責に歸する』からだてな、丸で見當違の見を立てゝゐる。なるほど斯う云ふ事實から民主思想は起りもしよう。又此の民主思想から生じた大逆事件も起りかねまい。しかし無政府主義又はそこから出發する大逆事件は、先づ先づご安心あつて然るべしである。無政府主義者の思想及び行爲は、そんな前世紀の常識で、分りつこはない。

又『政治以外の誤解は更に恐るべし』とあつて、『政治上だけでは、誤解が起つても、やゝ物わかりのよい連中に止まつて居る。物わかりの惡い連中に感ぜらるゝことが薄い。物わかりの惡いものが、成る程と合點の行くのは、高位高官に居るものが、たゞ位が高く、官が高く、勳等が高く、爵が高く、俸給が高いと云ふばかりでなく、金持になつて、榮耀榮華をつくすと云ふ所にある』と云ふ。これもお氣の毒ながら、十八世紀の佛蘭西あたりの大逆事件の原因だ。そこまで吾々を馬鹿にして貰ひたくはない。『若し高位高官の人が』、悉く『乃木大將のやうで』あつた所で、無政府主義者の數や力は、增えこそすれ、減る事は、毛頭ない。又いくら『帝室と國民とを接近せしめ』た所で、やはり此の場合の結果は、同前の事である。憚りながら無政府主義者は、そ

んなケチな考へで、働いてゐるのではない。

しかし餘程お高く著者を買つてやると、此の『大逆事件の教訓』一篇は、强ちに斯くの如き事件の再來を防ぐべき方法を說いたのではなく、此の恐ろべき事件をかりて不義不德なる爲政者を嚇しつけたものと云へば云へぬ事もない。けれども、それでは餘り價段が高過ぎるようだ。よし、さうだとしても、それによつて、著者が如何に巧みに問題の眞髓を遁れるかと云ふ事の、證左を擧げられるやうな始末にもなる。そして此の事は、猶此の書の他の幾多の篇にまでも、演繹される恐れを生ずる。

兎に角に『世の中』は、再び繰返して云ふが、あまり利口でない青年にとつての、一寸まれな、いゝをぢさんの處世訓である。そして人間の大部分が利口でないのだから、其の大部分の人々に、僕は此の書を推奬して置く。（金壹圓八拾錢、麴町有樂町實業之世界社）

■新聞記者の手帳（小野賢一郎著）

著者が甞つて東京日々新聞に連載した旅行通信の上方見物と越中越後記、外に三四の雜報を集めたもの。荒木郁子氏が新しい商賣の手初めとして出版したものださうだから、少しは『お引立』をしてあげてもいゝのだが、今時の若い人の書いたものとしてはあんまり馬鹿〳〵しくて、とても賞めてあげるわけには參らぬ。（金三十八錢、神田南神保町美人大學社）

■人間屠殺所（ラムスウス作 佐藤緑葉譯）

これは甞つて本誌に連載したものではあり、今更に批評紹介する要もあるまい。一冊にまとまつた本書を、更に讀者諸君の机上に備へるのも、決して無駄な事ではあるまい。（金六十錢、神田南神保町泰平館）

■財政經濟と生活問題

實業之世界社の編纂になる諸學者の論文集だ。政府の財政難と、國民の生活難とは、日本ばかりではない、殆んど世界を通じての、目下の二大困難である。そして此の二つの事實の爲めに、あらゆる文明國が、今や解体の危險に迫つてゐると云はれてゐる。或は更に進んで、其の解体の終らない限り、到底其の解決は始まらぬとまでも云はれてゐる。僕自身の議論も矢張りさうだ。從つて此の書の諸博士諸教授の所謂名論卓說も、國家其者を是認した上の議論である以上、僕にとつては、名論でも卓說でも何んでもない。一々詳しく批評すれば面白いのだが、兎角に政治論に亘りさうなので、此處には省く。

しかし本書は、此の二大問題に對して、諸學者がほゞ如何なる議論をもつてゐるかを知るには、隨分重寶な本である。（金一圓二十錢、麴町有樂町實業之世界社）

■春の目ざめ（エデキント作 野上臼川譯）

僅かに春機發動期を通り過ぎたばかりの少年少女が、敎師と親との狹隘な嚴格主義の態度に毒せられて、たゞ盲目的に其の不可抗の生の力に從つた結果、或は感化院にごぢこめられ、或は自殺し、或は懷姙して墮胎劑に殺される等の必然の悲劇的運命に陷つたといふ習俗的道德に對する一大警報である。そして作者の劇的天才は、此の大膽な脚本の上場後直ちに、獨逸國内の諸學校に性慾學を課せしめる迄に至つた。譯文も餘程苦心したものらしい、附錄として註解や評傳などを入れたのも親切な事だ。讀者諸君の是非一讀せられん事をおすゝめする。（金一圓二十錢、牛込神樂町東亞堂）

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

寄附金

(自六月一日 至六月廿八日)

■金一圓五十錢也　東京府　北島泰之助氏
■金五圓也　東京市　吉川　守邦氏
■金二圓也　東京市　相坂　佶氏
■金五圓也　東京市　岡野辰之介氏
■金十圓也　東京市　和氣律次郎氏
■金四圓也　東京市　佐藤　利吉氏
■金十五圓也　大坂市　横田淙次郎氏
■金五圓也　東京府　無　名　氏
■金一圓也　東京市　島田　筑波氏
■金拾五圓也　東京市　安成　貞雄氏
■金五拾圓也　東京市　無　名　氏
■金壹圓也　高松市　莫　哀　生氏
合計金百拾四圓五拾錢也

■お斷り■

一旦は原稿の全部を印刷所へ廻して了つたが、後で寒村の小説『謀叛人』が甚だ怪しからんと云ふ議論が起つて、いろいろ訂正説も出たが成立せず、遂にこれを拔き取つた爲に、本號は頁數が二十二頁に減つて了つた。讀者諸君の御諒恕を乞ふ。

■寄贈雜誌■

未來　自畫像　ニコ〳〵　生活と藝術
創造　蛇の舌　東洋哲學　へちまの花
銀磬　新公論　帝國文學　實業之世界
一隅　新世紀　馬上大學　人生と表現
エゴ　新佛教　新眞婦人　ナショナル
水甕　番紅花　現代詩文　早稻田文學
青鞜　東亞藝術　婦人評論　内外教育評論
反響　英語青年　文章世界　東京魁新聞
新潮　公友新報　文藝復興　鑛業及鑛夫
民聲　ROMAJI　東京評論　日本婦女新聞
向上　村落通信　サンデー　支那と日本
假面　水郷　河鹿　風景　塔　獨立評論

■六月號目次■

近代思想とサンヂカリスム(評論)……荒畑寒村
人間の漂流(評論)……和氣律次郎
五月二十一日(感想)……土岐哀果
噓(小說)……德永保之助
一挿話(小說)……荒畑寒村
大久保より(雜錄)……大杉榮
與太の會の記(雜錄)……寒村

■定價一冊金十錢、半年分前金五十五錢、一年分前金一圓。但し外國は別に一冊金二錢宛の郵稅を要す。
■郵券代用は五厘切手に限る。但し一割增の事。
■廣告料特別一頁十五圓、普通十圓。
■本社振替貯金番號東京一七一六三。

大正三年六月三十日印刷納本
大正三年七月一日發行

編輯兼發行人　府下大久保百人町三五二　近代思想社内　大杉榮
印刷人　府下大久保百人町三五二　荒畑勝三
印刷所　京橋區銀座四丁目一番地　福音印刷合資會社東京支店

大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆舘

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

澁川玄耳先生　高島米峰先生
杉村楚人冠先生　堺利彥先生　序
松崎天民先生跋
村上浪六先生題字

米國新聞記者
サムエル、ジー
ブノイス氏著
郡山經堂什譯

新聞記者生ひ立の記

四六版美裝
參百四十頁
定價八十錢郵稅不要

青年は夢想者なり。本書の原著者は十有八歳にして田舍新聞の一通信記者より一躍して新聞の經營者たらんと夢想し、事毎に意外の事實に逢着して遺憾なく失敗し、漂泊流離困頓の末、隠退者を夢想して幾何もなく變心し、遂に校正係となり再度青雲を得て記者生活に歸へり、最後に有數の大記者となる。其間喜劇あり、悲劇あり、而かもまた新聞經營者が實際に逢着する幾多の教訓を含む。印象派記事の書き方、大小新聞の內幕等のスッパヌキは他に見る可らざる特長あり。而して漂泊中著者が心中に萠せる罪惡心の大膽なる告白に至つては、又た一種の心理小說たるの價値を認むべし。新聞界の耆宿たる諸先生が賜はりたる序跋は堂々四十頁、出版界近來の偉觀壯觀、又た奇觀。

發行所

東京市麻布北新門前町一
振替口座東京七三五五番

新聲社書店

Asia Libra

出版通信

千九百十四年七月一日・東京

■東雲堂出版の圖書總目錄は御申越次第贈呈仕り候■

■生活と藝術 七月號は…………

●新作社會劇 純日本式 藝者屋町（四幕物） 伊庭孝

を以て全誌を埋め、その他に同人の詩歌を入れます、この新作が劇壇の注意を喚起することは今より疑ひありません。定價一冊十八錢、稅二錢。

■未來 第二輯

は最も豐富な質量を以て六月十五日書肆の店頭に現れました。未來社同人は自ら新藝術の使徒を以て任ずるものであります。高級なる、而して堅實なる藝術の歡喜に接せんとする人々の一讀を望みます。定價金六十錢稅八錢。

■三太郎の日記 阿部次郎氏著

は再版を市に送り出しました。この書に觸れる限りの人々はみな著者の誠實さに觸れ、浮薄なる心を振ひ落し自己に沈潛しやうとするに違ひありません。そして著者と倶に強く生きやうとするに相違ございません。書肆は斯の如き書を日本の思想界に奬め得た事を光榮とします。定價金一圓、稅八錢。

■層雲第一句集 萩原井泉水撰著

いまゝでの俳句は死物でありました、これからの俳句は我々の俳句でなければなりません。この集の出現が、俳壇に革命を齎すことを信じて疑ひません。內容は選句、著者の試作、俳話、七月十日發行の豫定。定價七十錢、稅八錢。

■未來社主催 リード・アーベント

山田耕作氏 伴奏 貫名美名彦氏

（時日）七月十二日夕七時（日曜日）
（場所）麹町丸の内保險協會にて
（會費）金一圓
（申込所）東雲堂書店

出版元■東雲堂書店■東京市日本橋區檜物町九番地 電話本局一八一七●振替五六一四

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

定價 金二十五錢

青鞜 七月號

郵稅 金一錢五厘

■面目一新せる七月號■

戀愛の自由　エレン・ケイ
女ばかり　哥津
下田次郎氏に與ふる書　野枝
氣色ばむとき　岡本かの
夏の花　齋賀琴
七日間の旅　らいてう
ソニア・コヴアレフスキイの自傳　野上彌生子譯
題未定　岩野清
背景の男　松井靜代
「離婚せる四十女の思ひ切つた告白」を讀んで　上野葉
ためらひ　三ケ島葭
夏木立　矢澤葉
廣がる愛　生田花世
最近の感想と讀んだもの、評　らいてう・みどり・野枝
編輯室より　らいてう・野枝

■編輯者　らいてう・野枝■

發賣所　東京市神田區表神保町（振替東京二七〇）　東京堂

發行所　東京巢鴨上駒込四一一　青鞜社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

第二卷 第七號

エゴ

七月一日發行
定價二十五錢

第七月號

目次

家出（脚本五幕物） 千家元麿
手紙（感想） 武者小路實篤
苦痛に付いての雜感 岸田劉生
グレコに付いて 佐藤惣之助
感想 千家元麿
存在の悩み（感想） 土屋小介

挿畫目次

グレコの肖像 グレコ
トレドの風景 同
聖ペール（表紙） 同
聖マタイ（裏繪） 同

發行編輯所
東京市牛込區新小川町三丁目二十一番地
エゴ社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

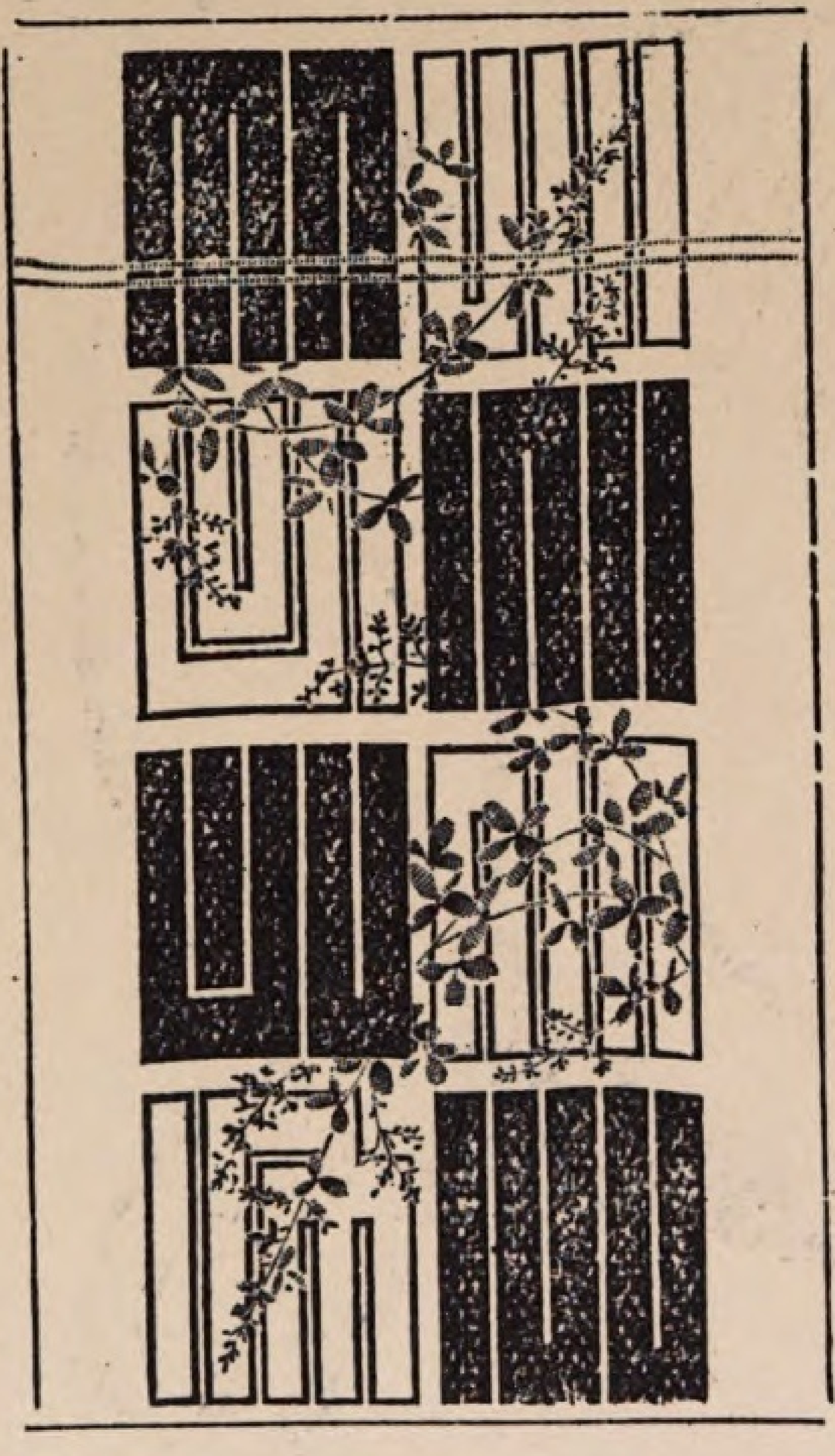
七月二日より開會

中元贈答品賣出し

旅行用品陳列會

■夏の中形は貴賤を論ぜず、上下を問はず、老幼之を用ゐざるはなし。右に示せる如き中形を始め他店に見ることを得ざる新らしき柄合澤山あり。

■眞岡 一反一圓五十錢
（三度染めて三十歳迄意氣向）



■源氏香は黒の陰日向にして、萩は薄花色。粋好みの二十三四歳迄用としては此上もなし。此他紋絽、紋壁絽、紋紗などには珍柄極て多し。

■友禪羽二重片側帶■
一筋 七圓二十錢

■三越呉服店に於ては、呉服、太物、洋服、時計、指環、諸雜貨、美術品、其他日常必要の品を販賣仕候。品質は精良、價格は低廉。

■御手紙にて、御注文被下候へば鄭重に選擇し、早速小包郵便にて御送り可申上候、何卒一度は御試しくだされ度奉願上候。

三越呉服店

■東京駿河町■振替貯金東京三〇〇番■

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

近代思想

第二巻第十號

大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正三年六月三十日印刷納本（大正三年七月一日發行）

七月號

金十錢

粉製・煉製・水製・子供用

ライオン齒(は)磨(みがき)

東京・本舗　小林・富次郎・大阪

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN